

多様な性を生きる

講師

堀内 かおる

性の分類には体のつくりによる性だけでなく、自分自身をどう思うかに関する「性」、パートナーを選ぶときに魅力を感じる方向性に関する「性」という側面があります。それは必ずしも、誰もが同じとは限りません。声を上げられないため、気づいていないかもしれないけれど、LGBTQ などセクシュアル・マイノリティーの人々は、あなたの身近にも存在しています。

きょうは、多様な性の形を生活している人々に焦点を当てるとともに、彼ら・彼女らの生き方から、本当に自分らしく生きるとはどういうことなのか考えます。

◆◆◆ きょうのキーワード ◆◆◆

ダイバーシティ (diversity)

年齢や性別をはじめとして、学歴・職歴、国籍・人種・民族、性的指向・性自認といった側面が人によってさまざまであるという「多様性」を意味する言葉です。一人一人がみな異なる個性ある人間同士として、互いに認め合い、共生することの大切さを象徴する言葉としても使われています。

LGBTQ

セクシュアル・マイノリティーの代表的存在とされる人々を表す言葉の頭文字をとって作られた言葉で、Lはレズビアン(女性の同性愛者)、Gはゲイ(男性の同性愛者)、Bはバイセクシュアル(男性と女性の両方を愛することができる人)、Tはトランスジェンダー(からだの性と心の性が一致していない人)を意味しています。Qはクエスチョニング、自分自身の性について分類されたくない、確定したくないという気持ちを持つ人や、性を一つの定義に絞られたくないという考えを持つ人のことです。

パートナーシップ制度

2015年に全国に先駆けて制定された、渋谷区の「パートナーシップ制度」は、条例において、男女の婚姻関係と異なる程度の実質を備える戸籍上の性別が同一(同性)の二者間の社会生活関係を「パートナーシップ」と定義し、二人がパートナーシップ関係にあることを確認して証明書を交付するものです。同様の証明書を発行する自治体は、その後、年々少しずつ増えています。

パートナーシップ制度は条例に基づき定める場合と要綱にのっとり証明書を交付する場合があります、自治体によって異なります。共通点は、パートナーシップ関係にあることが証明されると、親族等の「身内」にしか認められていなかったような、例えば入院した時に病状の告知を受けたり、住居や保険などの契約を行う際の保証人になることが可能となるなどの例が挙げられます。しかし、パートナーシップ制度は各自治体が独自に行っていることであって、法律上の婚姻とは異なり、法的な効力は限定的なものです。

1 性のグラデーション

「男」と「女」の境界線について考えたとき、あなた自身は、どれくらい確信をもって自分が男性あるいは女性だと思っていますか？ 100%男性、あるいは100%女性でしょうか。「男性である」あるいは「女性である」ということの決定的な判断基準は、どのようなことだと思いますか？自分のこれまでの生い立ちや現在の状況を振り返って書いてみましょう。

2 自分らしさを阻むもの

(1) セクシュアル・マイノリティーの人たちにとって、日常生活の中で「自分らしくありたい」と思ったとき阻んでいるのはどんなことか、考えてみましょう。

(2) あなたは現在、毎日「自分らしく」過ごせていますか？「自分らしくできない」と思うことがあれば、それは何が原因なのでしょう。考えてみましょう。

3 社会の変化と新たなパートナーシップ

セクシュアル・マイノリティーの人々が自分らしく生きられるように、社会にはどんな変化がみられるのか、書いてみましょう。

きょうのまとめ

だれもが自分らしく、幸せと思えるような毎日の生活を営んでいくために、どのような条件が整えられる必要があるでしょうか。番組を見た感想とともに、考えをまとめてみましょう。

《参考文献～もっと学びを深めたいあなたへ～》

☆ 杉山文野 『ダブルハピネス』講談社文庫

☆ 前田良 『パパは女子高生だった 女の子だったパパが最高裁で逆転勝訴してつかんだ家族のカタチ』明石書店

☆ 南和行 『同性婚—私たち弁護士夫婦です』祥伝社

memo

コラム

なぜ家庭科で LGBTQ なのか ～自分らしく生きるための学び～

番組では、LGBTQ を取り上げ、多様な性を生きる人たちの声を聴きました。「女性として歳を重ねていく未来っていうのはまったく想像ができなかった」という杉山文野さんは、28歳で乳房を除去する手術を受けました。そして、「やっと元に戻れたんだ」という、うれしさを感じたといいます。「自分らしく生きる」という言葉はとても心地よく、理想の生き方のように聞こえます。でも、自分らしくあるとすることは、残念ながら、誰にとっても今はまだ簡単なことではありません。本当に「自分らしく」あるために、強い心と覚悟でいくつもの社会的偏見や他者のまなざしに映る自分自身を乗り越えなければならない今日の社会は、程度の差こそあれ、我慢とストレスを強いる社会だといえるでしょう。

また、今日の日本社会では多様な家族の形がありますが、それらは必ずしも法的には認められていません。LGBTQ の人たちにとって、好きな人と一緒に暮らし、子どもを育てて家族になっていくという、人として「当たり前」と思われることが法的に保証されていないために、「当たり前の幸せ」をつかむことができないという困難に直面しているのです。誰もが、幸せに生きていく権利を持っています。社会のありようは、そこに暮らす人々の現状に合わせて変わりつつあります。性別を問わないパートナーシップを認める自治体も年々増えてきたとはいえ、課題はまだ残っています。性的マイノリティの人々に対する差別や偏見が、無意識のうちに心の中に住み着いていないか、一人一人が自分自身を振り返ってみる必要があるのではないのでしょうか。

私たちは毎日の生活の中で、さまざまなことについて意思決定をしながら、日々を送っています。日常生活というフィールドの中で、納得のいくような「自分」でいられているだろうか、という問いは、すべての人に共通する本質的な問いです。LGBTQ というカテゴリーは性の多様性を表していますが、これらの「レッテル」を貼って目に見える存在になったらそれで終わり、ではないのです。自分が何者であるかを意味する性自認、自分のパートナーにはどういう人を選ぶのかという性的指向、体の構造としての身体的性別という3つの側面について考えてみたときに、男性から女性までの範囲はグラデーション状態で、自分はそのどこかの一つの点に位置づいていると考えてみましょう。そして、それらをみんなひっくるめて、自分はいったいどんな人なのか、考えてみてください。単に知識として「LGBTQ について学ぶ」のではなく、「LGBTQ の人たちの生き方から、自分らしく生きることについて考える」ことが重要で、それは、生き方について考え学ぶ教科である家庭科を学習しているあなた自身の人生への問いかけにほかなりません。

家庭科は、自分自身の生活をつくっていくためのヒントとなることについて学ぶ教科です。どんなことが好きで、得意なことや苦手なことはどういうことなのか。将来にはどんな大人になって、どんなことをしていきたいのか。どんな人と一緒に、あるいは一人でどのような暮らしを営んでいきたいのか。何を大切にしているのか。そして、これからの人生、どのようにして日々の生活をつくっていくのか。あなたが「あなた自身」として歳を重ねていくために必要なものは何でしょうか？そのために、今やるべきことはどのようなことでしょうか？すぐに答えは見つからないかもしれませんが、考え続けて、あなた自身の人生のために行動してほしいと思っています。